

# 改訂版の序

「理解力をどう高めるか」は高等教育においても重要な命題である。これまでは一方通行の教育方法が一般的に行われ、そのため教科書や指導書は主として文字中心であった。学生や読み手の理解度を斟酌することは少なかったと思われる。しかし実際の手技については写真や動画などによるビジュアルな情報でなければ正確な認識を得ることはできないであろう。「百聞は一見にしかず」である。本書は読者の理解力を高めるために、カラー写真、画像、イラストを多用し、臨床の第一線で直ぐに応用できることを目的としている。

私の恩師の一人である故水野祥太郎教授は「アフリカの真ん中にパラシュートで降ろされても通用する整形外科医を育てるのだ」と学生や若い医師に言い続けながら厳しく指導した。そのため、教育は常に臨床実践を踏まえた理論や技術論であったと記憶している。そのことを実践できたとの自信はないが、自らの反省を込めてわかりやすい骨関節の外傷に関する技術書を企画し、できあがったのが本書である。

新しい臨床研修制度の下では、整形外科学が必須でないため整形外科を目指す若い医師が減少しているとのデータが示されている。超高齢社会の医療においては高齢者の骨や関節の変性疾患や外傷が重要な位置を占めることになる。その上、健康志向の強い国民はスポーツや運動を好むため、外傷を受けやすい環境にある。若い医師達に骨関節の治療を魅力的なものにするためには、骨折、脱臼、捻挫の診断治療でのbreakthroughが必要となる。その前提として、骨関節の外傷に興味を抱く多くの整形外科医や医療関係者を養成しなければならない。そのためにも本書が役立つことを期待している。

骨折や脱臼などの骨関節の外傷に関する英文教科書は多いが、日本語で書かれた本は意外に少ない。多くの整形外科教授は外傷の重要性を認識し、その基礎的背景を教育することには熱心であるが、外傷の実践には比較的無頓着である。治療を画一化することが困難なため、質の高い論文として完成させにくいことも理由の一つであろう。本書の執筆者の多くは外傷現場で治療に当たっている整形外科医であるため、断片的な側面もあろうが、生きた知識が記されている。研修医や若手の整形外科医はもちろん、理学療法士や作業療法士、看護師の身近に置かれた本書が日常診療で役立つことを願っている。

最後に、今回の改訂でも力を尽くしてくださった羊土社の編集部の方々の労に対し、深甚なる謝意を表す。

2010年6月

編者を代表して  
内田 淳正